

# 社会小説家としての Gaskell

「事実」に即して」描くということ<sup>1</sup>

閑田 朋子

はじめに

社会小説は現実の社会における題材を扱うフィクションである。このため、作家は現実に関するどの情報をどのようにフィクションで用いるのか、選択・決定することになる。本論は、社会小説家としての Elizabeth Gaskell が、現実に対してどのような距離の取り方をしようとしたのか、特に *Mary Barton* (1848) の Preface を中心として考察する試論である。

そのために本論では第一に、Gaskell がこの序文を書くに至った事情と同時に、事実」に即した描写を心がけたことを序文で述べていることを確認する。第二に、このような現実に忠実な描写を強調するあり方は、Gaskell 個人のあり方を表していると言うよりは当時の社会小説の一般的な傾向であったことを考察する。第三に、それでは *Mary Barton* が実際にどの程度、事実」に即して描かれているのか、他の現実に忠実な描写を謳う社会小説との違いは何であるのか、労働組合の描写を例としてその一端をつかむ。以上を踏まえて、結論では、Gaskell が *Mary Barton* を「事実」に即して」描こうとしたと序文で述べた真意に迫るとともに、社会小説家としての Gaskell の現実との距離の取り方を考察して論を結ぶ。

(1) *Mary Barton* の Preface における「事実」に即した」描写の宣言

*Mary Barton* の序文で、Gaskell は 'I saw that they (work-people) were sore and irritable against the rich' (下線は執筆者による) という表現を用いている。<sup>2</sup> また、次のように述べている。

I know nothing of Political Economy, or the theories of trade. I have tried to write truthfully; and if my accounts agree or clash with any system,

the agreement or disagreement is unintentional.<sup>3</sup>

この序文は、Gaskell が作品に社会問題を取りあげる際の作家としてのあり方を考える上で、避けて通ることが出来ない文章だろう。ただし、もちろん「事実  
に即して」(‘truthfully’) 見たままを描くと言う Gaskell の宣言として、単純に  
この文章を受け取ることは出来ない。ことは、より複雑である。以下、序文につ  
いて、考察する。

まず、序文は予め計画されて Gaskell の意思で書かれたものではない。1848  
年 10 月の出版のわずか数ヶ月前に出版社の Edward Chapman から要望があり、  
Gaskell は 7 月 10 日付けの手紙で次のように返事をしている。

I hardly know what you mean by an ‘explanatory preface’. The only  
thing I should like to make clear is that it is no catch-penny run up since  
the events on the Continent have directed public attention to the  
consideration of the state of affairs between the Employers & their work-  
people.

If you think the book requires such a preface I will try to concoct it; but  
at present, I have no idea what to say.<sup>4</sup>

Gaskell は Chapman の要望によってすでに題名と副題を変えている。この手紙  
からは、そのような序文は必要ないという Gaskell の苛立ちが感じられる。

結果として「でっちあげ」(‘concoct’) られた序文で、Gaskell は、わざわざ  
‘I know nothing of Political Economy, or the theories of trade’ と言い切っている。  
もちろん、Gaskell にポリティカル・エコノミィについての知識が無いはずはな  
い。これについては様々な理由が考えられる。Daly は、作中に描かれた労働者  
達の「不幸な状態」(‘unhappy state of things’) に対して、<sup>5</sup> 実際的な問題解決の  
手段を示していないことへの批判に備えたとしている。<sup>6</sup> また、当時のマンチェ  
スターの工場主たちにとっては、ポリティカル・エコノミィとは、レッセフェー  
ールの代名詞であったことを Donald Read は述べている。<sup>7</sup> 読者に労働者への同情  
と共感を呼びかけるこの作品は、従来の中産階級の作者による社会小説に比

較して労働者寄りの物語を展開しているとも言える。ミドルクラスの読者に、そのショッキングな展開の準備をさせるために、予め序文で無知を理由としてポリティカル・エコノミイを否定したとも考えられる。<sup>8</sup> また、予測された資本家層、特にマンチェスターの工場主達からの反発と非難を、事実を事実として描いただけなのだから仕方がないという態度によって中和しようとしたとも考えられるだろう。一歩進めて、足立は、革命派支持ではないという Gaskell の政治的立場の表明であろうと解釈している。<sup>9</sup>

以上はどれも説得力ある説明であり、Uglow の言葉を借りれば ‘a woman braced for attack’ としてのギヤスケルの姿が私たちに伝わってくる。<sup>10</sup> だが、守りの姿勢と同時に、私はこの序文に見られる Gaskell の攻撃性にも目を向けたい。Uglow は、次のように述べる。

With the remark, ‘I know nothing of Political Economy, or the theories of trade’, she (Gaskell) deliberately distanced herself from Harriet Martineau and other professed experts. She was defiant as well as modest: ‘truth’ must come beyond ‘system’.<sup>11</sup>

己の小説が何らかの政治的・社会的思想体系にのっとった説、特にポリティカル・エコノミイとは無関係であることを宣言して、事実は思想体系に優るはずだという信念を語る。これは、たしかにレッスフェールを始めとする理論に目をふさがれて現実の労働者の苦しみを見ないものに対するけんか腰とも言える挑戦的な態度である。基本的には Uglow の意見に賛成ではあるが、私は更に強い攻撃性を Gaskell の序文に読み取る。私がそのように考える理由は、他の社会小説の作家との比較にある。

## (2) 「事実に即した」他の社会小説との類似

まず、小説の序文や前置きで、作品の真実性を宣言するのは Gaskell 一人に見られるあり方ではない。当時のミドルクラスの作家の手による主にミドルクラスの読者を想定して書かれた社会小説の流れを見ると、fancy の大切さを全面に出す Charles Dickens のような例外はあるものの、<sup>12</sup> 全体としては描かれた社会問

題に嘘や誇張がないことを強調する傾向がある。これは、読者に馴染みのない the other nation を描くという前提を考えれば、当然のことだとも言える。大概の作家もしくは出版社は、時には執拗なほどに作品の真実性を謳っている。例えば、Stone 夫人は、*The Young Milliner* (1843) の Introduction で、次のように述べている。

The Narrative itself is, of course, fictitious; but the circumstances adduced are unexaggerated and strictly true.<sup>13</sup> (下線は執筆者による)

また、Disraeli の *Sybil*(1845) の広告が典型的であるので、やや長くなるがここに引用する。

The general reader whose attention has not been specially drawn to the subject which these volumes aim to illustrate, the Condition of the People, might suspect that the Writer had been tempted to some exaggeration in the scenes which he has drawn and the impressions which he has wished to convey. He thinks it therefore due to himself to state that he believes there is not a trait in this work for which he has not the authority of his own observation, or the authentic evidence which has been received by Royal Commissions and Parliamentary Committees. But while he hopes he has alleged nothing which is not true, he has found the absolute necessity of suppressing much that is genuine. For so little do we know of the state of our own country that the air of improbability that the whole truth would inevitably throw over these pages, might deter many from their perusal.<sup>14</sup> (下線は執筆者による)

また、Charlotte Elizabeth Tonna の *Combination* ( 1832 )、Julia Kavanagh の *Rachel Gray* ( 1856 )、Trollope の *Jessie Phillips* ( 1844 ) のように副題に 'A Tale, Founded on Fact' や 'A Tale Founded on Fact'、'A Tale of the Present Day' 等の言葉を用いる場合もある。Gaskell の *Mary Barton* の副題もまた 'A Tale of

Manchester Life'と実在の地名を挙げたものである。ただし Chapman の要望でタイトルが *John Barton* から *Mary Barton* に変更された際に Gaskell 自身がつけた副題は'Manchester Love Story'であった。Manchester という実在の地名をあげている点では一致しているが、最終的な変更により、他の社会小説の一般的な副題により近づいている。

更に、Gaskell の序文に関して、他の先行作家との類似点として特筆すべきは、前述の引用部分が Martineau のある手紙の文章と酷似していることだ。この手紙文は、1833 年に *The Monthly Repository* に公表されている。

I was far from suspecting while I wrote them (*The Rioters* and *The Turn-out*) that wages and machinery had anything to do with political economy; I do not even know whether I had ever heard the name of the science.<sup>15</sup>

Gaskell は異論がある場合は、先行小説が用いている表現を自身の作品の中に使用し、その意味を巧みにずらしていく作家である。*The Monthly Repository* は、1833 年当時は、後に Gaskell の生涯の友となる Tottie こと Eliza Fox の父親 William. J. Fox が編集していた。彼は織工からユニテリア教会の聖職者に、そして急進派ジャーナリストとなって、*The Monthly Repository* をユニテリアンの色に染めていった。<sup>16</sup> よってユニテリアン派の聖職者の妻であった Gaskell がこの雑誌を、そしてこの文章を読んだ可能性は、決して低くはない。この二つの文章の類似は、単なる偶然では済ませられないだろう。序文は、Martineau を、かなり明確に意識して書かれた文章ではないかと思われる。

### (3) 「事実即した」他の社会小説との違い

事実即した忠実な描写を謳ってはみても、それぞれの作家がどこまで現実に忠実な描写をしているかどうかはまた別問題である。社会小説は、'fiction with a purpose' の名前で呼ばれることもある。特に *Mary Barton* が出版された 1840 年代には、社会小説も文学としての成熟期を迎えるが、それ以前には Kestner が 'primarily for advancing theses' と述べているように、<sup>17</sup> 政治的・社会的意図の伝達媒介として用いられるケースが目立った。例えば、Harriet Martineau の

*The Rioters* (1827) は、マンチェスターの労働者にライト運動の「愚かさ」(‘the folly’) を悟らせることを目的としている。<sup>18</sup> その2年後に書かれた *The Turn-out* (1829) は、ノッティンガムとダービーの工場主達の依頼によって書かれ、賃上げをめぐる労資紛争が無益であることを示している。<sup>19</sup> このような小説が、事実に即していることを高らかに謳いながら、意図的であるか無意識にであるかは別問題であるが、実際には一方的なものの見方をしがちであることは否定できない。

Gaskell の場合も、後述するように the other nation を描く上での誤謬を完全に免れてはいない。だが、経済不況の原因など専門家ではない Gaskell の知識の限界の外にあった事項は別として、経済変動の様子などは、驚くほど正確に描かれていることも事実である。作中の経済変動は、多少の例外はあるものの、貧困の中で John の息子が亡くなる 1810 年代の Napoléon の大陸封鎖やアメリカとの戦争などに起因する不況から始まって、Carson 氏が工場主へと申し上がる 1820 年代から 30 年代前半の好況期、労使関係が悪化するその後の不況まで、実際の経済変動に沿って描かれている。やや細かな例をあげれば、Ben Davonport が亡くなる 1839 年の春の悪天候も実際の天候不順とそれによる穀物の値上がりにも合致している。<sup>20</sup> 他の作家の追従を許さない執拗な正確さだと言えるだろう。

より具体的に Gaskell の社会小説家としての態度を作中から探るために、例として *Mary Barton* の労働組合像を、他の作家が描くそれと比較してみよう。1848 年に出版されたこの作品には、1839 年のチャーティスト運動と労働組合が描かれている。現実には 1830・40 年代にマンチェスターで活動的であったとは言いがたい労働組合運動が、チャーティズムと混同されたのが作中では活発に描かれているなど、多くの誤謬を含むが、他の作家と比較すると Gaskell がいかに「事実に即して」労働組合を描こうとしたのかが分かる。

当時のミドルクラスにおける一般的な労働組合のイメージは、恐ろしい犯罪集団であった。入会時に組合員に絶対の恭順の誓いをさせ、この誓いと恐怖政治で組合員を「がんじがらめにして」(bind)、「暴君的な主人」(tyrant master) に反抗し、強制的に暗殺や放火を命じる秘密結社である。組合の入会の儀式では、壁に骸骨や剣、斧がかけられ、入会者は目隠しをされ、中には恐怖のあまりに気が狂う者もいるという主旨の記録が繰り返された。これは、組合を嘲弄・揶揄し

たカリカチュアではない。多くのミドルクラスの間人は、真剣にこのようなイメージを信じていたようだ。例えば、1825年の *Hansard* や、<sup>21</sup> 1834年 Edward Carleton Tufnell の *Character, Object, and Effects of Trades' Unions*、<sup>22</sup> そしてこの他にも1835年の複数の雑誌に同様の記述が見られる。また、小説から例を挙げると、1842年には Stone 夫人の *William Langshaw*、1845年には Disraeli の *Sybil* に、同様の誓いの儀式が描かれている。Stone 夫人は、真実性を裏付けるためにその場面にわざわざ注をつけて出典をあげている。<sup>23</sup>

一方、他の作家と同じ組合像を下敷きにして入るものの、Gaskell は、組合の入会の儀式を直接に描くことはしない。*Mary Barton* には、組合で誰が復讐のために Harry Carson を暗殺するのか、くじ引きで決定する場面がある。

Their clenched fists, their set teeth, their livid looks, all told the suffering which their minds were voluntarily undergoing in the contemplation of crime, and in familiarising themselves with its details.

Then came one of those fierce terrible oaths which bind members of Trades' Unions to any given purpose.<sup>24</sup>

拳を固く握り締め歯を食いしばる組合員達の様子は、組合への恭順の誓いと殺人という大罪の間で追い詰められた精神状態を読者に伝える。入会の儀式に使われる骸骨や剣、目隠しなどの扇情的な小道具は姿を消し、組合員をがんじがらめにする誓いと彼等の良心の葛藤が前面に押し出されて描かれている。このような組合の描き方は、ミドルクラスの作家による当時の社会小説においては、例外的である。怪物的な恐るべき犯罪集団としての組合像を描く代わりに、Gaskell は、良心に苦しむ個人としての組合員に焦点をあてたのだ。

## 結論

*Mary Barton* の序文にある「事実在即して」描くという言葉は、社会小説家として Gaskell のあり方を知る上で重要な言葉である。この序文は従来作品よりも労働者寄りの立場に立った作品の展開に対する非難・批判に予め備えた守りの姿勢として解釈されることが多かった。確かに、表面上は自らが無色透明な媒体

となって事実を読者に伝えると謙虚に表現することによって、作品に対する資本家層からの非難に備えるといった守りの体勢をとっているかのように見える。だが、他のミドルクラスの作家の手による社会小説と比較する時、見えてくるのはより攻撃的な Gaskell の態度である。

まず、本論文では、小説が事実在即していることを強調する表現が、Gaskell 個人の宣言であると同時に社会小説の常套句であったことに注目した。そして、特にこの Gaskell の序文の文章が、ポリティカル・エコノミイに基づいて複数の社会小説を展開してきた Martineau の手紙の文面と嫌味なほどに似ていることを指摘した。前述のようにこれは単なる偶然とは言い難い。作為的に先行小説家の常套句を用いた上で、更に執拗なほどに念をいれて Martineau の手紙文と酷似した文章を使って、Gaskell は実に巧みな皮肉を仕組んだのではないだろうか。

労働者の苦しみを目の当たりにした Gaskell は、ポリティカル・エコノミイをはじめとする理論よりも、実際にその目で見た事実を重んじる。他の社会小説家と酷似した文章を序文に用いることで、他の小説家や理論をふりかざす専門家と自らを差異化するばかりではなく、彼らを攻撃・非難する実に挑発的な態度が序文には見え隠れする。Chapman の要望で、労働組合の命を受けて殺人者となる *John Barton* から *Mary Barton* に題名を変え、副題を従来 of 社会小説に倣った形に変更し、更に自分では必要のないと考えていた序文を「でっちあげる」いらだちのなかで、Gaskell は温和を装って攻撃するという方法をとったのではないか。Chapman に対して、そして目前の労働者の苦しみを理解しない理論家達に対して、更には殺人者の名が表題になっている作品を非難するだろう偽善的な読者に対して、彼女は一矢を報いたのだ。

なお、当時の全ての社会小説と見なしうる作品を網羅する事は不可能であるし、ある程度の傾向をつかむだけでもサンプルとなる社会小説はそれなりの数が必要となる。その意味で、他の社会小説との比較により Gaskell の社会小説家としての態度を明らかにしようとする本論は試論にすぎないが、叩き台となることで、多少とも Gaskell の社会小説家としてのあり方に光を当てることができれば幸いである。



1. 本稿は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部 日本ギaskell協会合同大会シンポジウム「社会小説家としてのディケンズとギaskell」(2004年10月3日、於大手前大学西宮キャンパス)において口頭発表した内容のうち、特に Gaskell の *Mary Barton* の Preface に関する部分に焦点をしばり、大幅に加筆したものである。
2. Elizabeth Gaskell, Preface, *Mary Barton: A Tale of Manchester*; by Gaskell, ed. Macdonald Daly (London: Penguin, 1996) 3.
3. Gaskell, Preface, *Mary Barton*, 3.
4. Elizabeth Gaskell, To 'Edward Chapman,' 10 July 1848, letter 27 of *The Letters of Mrs Gaskell*, ed. J. A. V. Chapple and Arthur Pollard (Manchester: Mandolin, 1997) 58.
5. Gaskell, Preface, *Mary Barton*, 3.
6. Macdonald Daly, Notes, *Mary Barton* by Elizabeth Gaskell (London: Penguin, 1996) 396.
7. Donald Read 'Chartism in Manchester,' *Chartist Studies*, ed. Asa Briggs (London: Macmillan, 1959) 32-33.
8. Macdonald Daly, Introduction, *Mary Barton* by Elizabeth Gaskell (London: Penguin, 1996) xv-xvi.
9. 足立万寿子『エリザベス・ギaskell - その生涯と作品』(東京:音羽書房鶴見書店、2001) 65。
10. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell* (1993; London: Faber, 1994) 192.
11. Uglow, *Elizabeth Gaskell*, 192.
12. Michael Slater, *An Intelligent Person's Guide to Dickens* (London: Duckworth, 1999) 11-32.
13. [Elizabeth] Stone, Introduction, *The Young Milliner*, by Stone (London: Cunningham and Mortimer, 1843) n.pag.
14. 'Advertisement,' *Sybil* by Disraeli
15. Harriet Martineau, to M. B. Maurice, 3 June 1833, printed in *The Monthly Repository* 7(1833): 612f.
16. Uglow, *Elizabeth Gaskell*, 170; Ivanka Kovačević, *Fact into Fiction: English Literature and the Industrial Science 1750-1850* (Chatham: Leicester UP, 1975) 212.

17. Joseph Kestner, *Protest and Reform: The British Social Narrative by Women 1827-1867* (London: Methuen, 1985) 18.
18. Harriet Martineau, 'Some Autobiographical Particulars of Miss Harriet Martineau,' *Monthly Repository* 7 (1833): 613.
19. Kovačević, 'Harriet Martineau,' *Fact into Fiction* 213.
20. 拙論 'Mary Barton: The Truthful Novel Possessed by Mammon' 『ふいおーちゆん』 新生言語文化研究会 10-11 (2000): 19-31 参照。
21. *Hansard* 1825 XIII col, 1402.
22. [E. C. Tufnell, ] *Character, Object and Effects of Trades' Unions: With Some Remarks on the Law Concerning Them* (James Ridgway and Sons; London, 1834); rep. as *Character, Object and Effects of Trades' Unions 1834* (New York: Arno, 1972)
23. [Elizabeth] Stone, *William Langshawe, the Cotton Lord*, vol. 2, (London: Richard Bentley, 1842) 174.
24. Gaskell, *Mary Barton*, 190.